「受難週-棕櫚主日礼拝」・・・
『ゲツセマネ—あなたの苦悩を包み込むキリスト』[i]（要約）
マタイの福音書 26章 36節～39, 41節
説教者：原田憲夫

【序】

紀元30年頃の春のある夜。エルサレムの一角にある家で主イエス・キリストは弟子達と夕食をともにされます。所謂「最後の晩餐」です。

それから弟子達と神様を讃える歌—賛美歌を歌ってから、オリーブ山へ行かれます。そこからさらに谷を挟んでエルサレムの街の東側にある「ゲツセマネ」と呼ばれる静かな園に行かれます。

【1】苦悩を搾り出す祈り

しかしこの場所で映し出される主の姿はいつもの静かで穏やかな姿とはまるで違います。主は悲しみのあまり身をねじり動かし始め、伴って来た弟子達にこう語りかけます。

「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」(38)

さらに伏して父なる神様に祈ります。

「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。・・・」(39)

苦悩に喘ぐ主イエス・キリスト！

「ゲツセマネ」という名前は「オリーブの油を搾る」ことに由来すると言われますが、まさにこのときの主の祈りは「全身全霊で苦悩を搾り出す」祈りでした。別の（福音書の）箇所には「汗が血のしずくのように地に落ちた」、とあります（ﾙｶ22-44)。渾身の力、全霊を傾けて祈る主。

【2】すべてを委ねる祈り

このとき主が「過ぎ去らせてほしいと願った杯」とは何でしょう？

この祈りの中に、主がこの世に来られた目的がまるごと込められていました。「十字架への道」です。

しかしこの主の苦悩と葛藤の祈りは、主がご自分の内に抱える苦悩や怖れではありません。

すなわち、全人類の罪—すべての人の罪を一身に引き受け、その罪を贖うために身代わりの死を遂げるために歩む「十字架への道」。それが主の飲むべき「杯」でした。

今日のあなたや私の苦しみ、悲しみ、悩み、うめき・・・が、このゲツセマネの主の祈りの中にみんな包み込まれていたのです。

やがて主は父なる神様にすべてを明け渡されます。「苦い杯を飲む」道、「十字架への道」を進まれます。今日の後半の祈りの部分です。

「しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」(39)

【結—招き】

ゲツセマネでの祈りを終えた主は、弟子たちの元に戻って来て、ペテロにこう言われます。

「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」(41)

この「誘惑」とは「試練」です。すべての弟子が「つまずく」といった非常に厳しい試練です。弟子達は主と共にたましいを注ぎだして祈るべき局面でしたが、眠ってしまいました。これが私たちの現実です。

けれども、そうした弟子達—私たちの弱さを主はわかっていてくださいます。誘惑/試練と戦う力は、自分の力で戦えない自分の弱さを知り、主の御手の中に自分自身を明け渡したときから与えられるのです。

主は、今試練の中にある私たちに—あなたや私に—「わたしとともに目を覚まして祈りなさい」と私たちを支えて下さいます。

⇒受難週を迎えた今日、救い主イエス・キリストがゲツセマネの祈りの中で、あなたの苦しみ、悲しみ、悩み、うめき・・・をみんな包み込み、引き受けてくださったことを知ってください！

そして、今の試練の時こそ、ゲツセマネの主とともに心を一つにし、共に祈ろうではありませんか！

---

[i] <受難>のことを<Passion>と言うが、もともと激しい感情のこと。マタイの福音書をはじめすべての福音書はゲッセネマネで祈るキリストの姿にこのパッションを映し出す。cf. J.S.バッハの「マタイ受難曲」。